

# フランス・旧植民地出身移民女性の抵抗と言語

——〈声〉を取り戻すための演劇制作——

Résistance des actrices de l'immigration postcoloniale et langues :

Création d'une pièce de théâtre pour retrouver les voix étouffées

東京外国語大学

Tokyo University of Foreign Studies

田邊佳美

TANABE Yoshimi

ふらんぼー(Flambeau) vol.47 2021, p.103-121.

原稿受理 2021-12-19 ; 最終版 2022-1-27

抄録

本稿は、現代のフランスで階級的・人種的・ジェンダー的に抑圧・客体化され、沈黙を強いられた旧植民地出身移民(やその子孫)の女性たちの文化・芸術実践を通じた抵抗に着目する。とりわけ、パリ郊外で移民・庶民階層の集住する地区に拠点をおく女性グループが制作した演劇作品とその制作過程についての分析から、客体化により奪われた〈声〉——言語とそれに連なる文化や記憶——を取り戻す様相やその戦略を明らかにする。

## Résumé

Cet article porte sur la résistance, par l'expression culturelle et artistique, de femmes (descendantes) de l'immigration postcoloniale, vivant en France contemporaine et réduites au silence par la matrice d'oppressions. A partir d'une analyse du processus de création d'une pièce de théâtre dans un espace collectif féminin en banlieue parisienne, il met en lumière les modalités d'actions et tactiques visant à retrouver les « voix » étouffées, et ainsi à se réappropriier langues, cultures et mémoires.

キーワード (旧植民地移民、反差別、言語実践)

© ふらんぼー Flambeau 47 (2021) pp.103-121.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室  
183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1 Asahi-  
cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY)下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



## 1. 問題関心——奪われた〈声〉を取り戻す

フランスは戦後の高度成長期に(旧)植民地から多くの移民を受け入れた<sup>1</sup>。1970年代の石油危機で新規移民の受け入れ停止を決定するが、このことはむしろ、すでに労働者としてフランスに滞在していた移民が家族を呼び寄せ定住することを促した。この時、国や自治体の政策が交錯するなかで、多くの移民が郊外や都市中心部でも低所得者が集まる地区の団地へ入居し、1980年代には、非白人で庶民階層に属する移民やその家族が集住する現在の大衆地区(*quartiers populaires*)<sup>2</sup>の原型が都市周辺部に生まれる(森2015)。これら移民やその子孫は、脱産業化による社会の構造変化や、排他的な教育・社会制度のなかで、「社会のあらゆる側面における人種差別、裕福な都市部との教育格差、切り詰められる社会保障」(Collectif 2013: 200)など様々な問題に直面していく。

政治家やメディア、そして研究者は、こうした「移民(*immigrés*)」、「移民出自の若者(*jeunes issus de l'immigration*)」、さらに近年では「移民女性(*femmes immigrées*)／スカーフ女性(*femmes voilées*)」を集団として問題化し、「非行(*délinquance*)」や「治安(*sécurité*)」、「統合(*intégration*)」の問題として「語りの対象／客体(*objets-parlés*)」(Bouamama 2013: 17)にしてきた。他方で、当事者の移民やその子孫たちは、日常的な経験の中で自らの置かれた状況を分析し社会に訴えようと試みるも、絡み合う権力構造のもとで周縁化され<sup>3</sup>、その声を奪われてきた<sup>4</sup>(Boubeker 2003: 24)。強固な客体化・周縁化の構造のなかであって、旧植民地出身移民(の子孫)は、これまでも様々な集合行為や日常的抵抗を通して、奪われた〈声〉を取り戻すこと、すなわち他者に代弁されることも命令されることもなく自らの視点と言葉で発言することを試みてきた。

本稿は、こうした旧植民地出身移民とその子孫による集合行為や抵抗に関して、人種・階級関係と連動するジェンダー関係の抑圧にも直面する旧植民地出身移民の女性たちに着目する。旧植民地出身移民の女性、そしてその子孫にあたるマイノリティ女性たちは、男性の支配下に置かれた「弱い者、従順な被害者、学歴がなく、社会の周縁に生きる者」(Collectif 2013: 200)という本質化された他者性のイメージを押し付けられ(Guénif-Souilamas 2000)、自らや社会について語る可能性から一層疎外されてきた。フェミニズムとも連関する「女性」としての社会経験に根ざした抵抗は、とりわけ人種とジェンダーという支配関係の交差性のもとで、ポストコロニアルなフランス社会を生きるマイノリティ

---

<sup>1</sup> フランスは19世紀以来、産業革命で不足する労働力を補うため多くの移民を欧州諸国から受け入れてきた。戦後の移民は、当時まだ植民地だったアルジェリアを筆頭に、非西洋諸国からの非白人移民の受け入れという点において歴史的な転換を意味した。

<sup>2</sup> 大衆地区(*quartiers populaires*)は、庶民階級ないし労働者階級(*classe populaire*)のなかでも、もっとも質素な暮らしぶりをする人々で構成されているという点で社会的に均質な社会空間を成す(村上2019)。大衆地区に暮らす人々が、愛着やアイデンティティの拠り所などの意味を *populaires* という言葉に込め使う場合もある一方で、メディアや政治家が「郊外(*banlieues*)」という言葉の否定的なイメージを払拭する婉曲表現として用いる場合もある。

<sup>3</sup> 階級、言語、国籍、人種、都市中心部と郊外という地理的關係性など。

<sup>4</sup> Boubeker(2003)は *une voix étouffée* という表現を使っており、これは「(発そうとしても発せないように)押しつぶされた声」を意味するが、この表現のなかには言語・文化・記憶の剥奪も含まれているという観点から、「奪われた声」と意識した。

の女性たちに困難な対応を迫る<sup>5</sup>。特に問題となるのは、移民女性・マイノリティ女性が家父長制やセクシズムについて発言することや「フェミニスト」として活動することが、彼女たちの父や兄弟である移民男性・マイノリティ男性の他者化を促進し、彼らに対する「道徳的レイシズム(racisme vertueux)<sup>6</sup>」(Guénif-Souilamas & Macé 2004: 97)に根拠を与えてしまうことだ。逆に、スカーフをかぶる女性・少女や「伝統的」衣装を着る女性は、移民男性・マイノリティ男性とその「後進的」な文化・社会の被害者・共犯者として本質化され、フランス社会に「統合」していないと非難される(Guénif-Souilamas 2000)。こうした制約・条件のもとで〈声〉を取り戻す営みは、どのような可能性／不可能性を提起するのだろうか。

本稿では、パリ郊外の大衆地区で活動する女性グループでの調査をもとに、旧植民地出身移民(の子孫)の女性たちによる集合的な文化・芸術実践を考察する。より具体的には、2009年から2013年にかけて女性グループが制作した演劇作品に着目し、作品の意義と政治性、制作主体を成した組織やその集合行為の特性、制作プロセスと作品それ自体における言語実践を分析することで、女性たちが言語や文化の主体としての意識を取り戻し、社会に語りかける〈声〉を獲得するための具体的な場と戦術(De Certeau 1980=2021)を明らかにする。

## 2. 奪われた〈声〉の重層性・複数性——独立性の問題

他者に代弁されることも命令されることもなく自らの視点と言葉で発言することは、フランスの旧植民地出身移民とその子孫の集合行為における、一貫した争点として指摘されている(Hajjat 2015)。1960-70年代の移民労働者たち、1980-90年代の旧植民地出身移民の新たな「世代<sup>7</sup>」の運動家たち、1990-2000年代のイスラーム教徒、黒人、サン・パピエ、マイノリティ女性の運動家、2010年代のイスラーム・フェミニストやアフロフェミニストまで<sup>8</sup>、旧植民地出身移民とその子孫が組織した各時代の主要な社会運動や日常的な抵抗において、組織化・集合行為・発言に関して独立性を確保し、他者(とりわけマジョリティ)と対等な立場を確立すること、すなわち「政治的独立性(*autonomie politique*)」の獲得は重要な争点であり続けてきた(ibid.)。

すでに、1960-80年代の移民労働者たちは、既存の労働組合との回路を構築し労

---

<sup>5</sup> 「スカーフ」については1980年代後半に社会問題化したが、人種・ジェンダーの交錯した抑圧構造は、移民女性・マイノリティ女性にとって新しいものではなかった。1980年前後にリヨンで活動した旧植民地出身移民の子孫である女性たちの団体、Zaâma d'Banlieueに関する研究において、移民とその子孫が人種関係において共通して経験する抑圧と、女性たちがジェンダー関係のなかで経験する抑圧の間で、二つの争点をどのように接合するかという困難を克服しようとする様相が報告されている(Nasri 2011, 2018)。

<sup>6</sup> 特定の人種／民族集団の家父長制やセクシズムを糾弾するという手法において道徳的な鎧をまとったレイシズム。特定の人種・民族集団の文化が本質的に家父長的でセクシストであると想定する一方で、自文化がそれと比較して先進的であると位置付け、マイノリティを劣等化する特徴をもつ。

<sup>7</sup> ここでの「世代」は、フランスで生まれた移民の子供世代というだけでなく、社会化の過程で原点となる社会的経験を共有する個人の総体としての世代も意味する。

<sup>8</sup> アフロフェミニストについてはLarcher(2017)とMwasi(2018)、イスラーム・フェミニストについてはAli(2012)、両者に共通する論点については拙稿(田邊 2016)を参照のこと。

働運動のなかに場を獲得しながらも、場合によっては独立した組織を形成し、フランス人労働者と同等の待遇や人種差別的処遇の撤廃などを要求した(伊藤 1988, Hajjat 2015)。1980年代に端を発する新たな「世代」を中心とした運動、とりわけ1983年の「平等と反レイシズムの行進(Marche pour l'égalité et contre le racisme)」は、かつてないメディアや政治家の注目を集め、最終局面では10万人を動員する出来事へと発展した。しかし、警察による逸脱した取り締まりや人種主義殺人の告発という当初の動機にも関わらず、行進というアクションの障壁の低さや運動のメッセージ・視点の発信における曖昧さや柔軟性のために(Hadj Belgacem & Nasri 2018)、当初の動機を満たすための政治的独立性は獲得されなかった。参加者自身が「挫折した運動(mouvement avorté)」(Bouamama 1994)とも評したこの運動は、結果的に平和的で非暴力的なアラブ人の若者、「ブール(Beur)<sup>9</sup>」による運動として神話化され、その政治的な動機は忘れ去られた(Hadj Belgacem & Nasri 2018)<sup>10</sup>。

1983年の行進に端を発したその後の運動も、制度化された非当事者中心の団体による反レイシズム運動の支配、「当事者」自体の多様性と分化、運動の公的支援への依存などの背景から次第に弱体化したが(Hajjat 2015)、この運動が一部の世代・集団に「経験の共同体」の効果を持ち、政治意識を芽生えさせたという点で、「原点となる運動(mouvement fondateur)」(Hadj Belgacem & Nasri 2018: 30)であったこともまた指摘されている。運動の展開や帰結を含むプロセスそれ自体が、その後の運動に影響を与えたという点で、この運動は転換点となったと言える(Tanabe 2018)。活動を続けた「行進世代」の運動家たち、そして差別経験において他の世代と「経験の共同体」を構成する2000年代・2010年代以降の若い世代の運動家たちは、組織化・集合行為・発言における「当事者(concerné)」性を追求するやり方で(Tanabe 2016)、より明示的に政治的独立性を希求していることが明らかになっている。それを象徴する具体的な戦略の一つが、「当事者のみの組織形態(la non-mixité organisationnelle)」による集会の開催や団体のメンバー構成である(Larcher 2017: 103)。共有された抑圧経験について共通の声を抽出するために、一時的に公共空間の外に撤退することを意味するこの実践は、フランスのフェミニズム運動ですでに不可欠な道具として採用されてきたが(ibid.)、2010年代を通して反人種主義の文脈における戦略として急速に台頭した(Tanabe 2016)<sup>11</sup>。

当事者のみで抑圧経験を共有するという戦略は、他者やマジョリティに支配されずに組織・集合行為・発言の独立性を確保する有効な手段となり得る<sup>12</sup>。他方で、この戦略は、

<sup>9</sup> 「アラブ人(Arabe)」の逆さ言葉。

<sup>10</sup> 運動主体を特定文化や特定世代と結びつける解釈は、行進参加者の多様性を覆い隠し、その政治性を覆い隠す効果を持った。実際には、移民経験、世代、人種/エスニシティ・ジェンダー・階級において多様な層が参加していた(Hadj Belgacem & Nasri 2018)。

<sup>11</sup> 例えば「アラブ人女性のみ対話集会」、「黒人フェミニストのアソシエーション」、「クイアなアジア人のコレクティブ」など。他方で、共和主義・普遍主義のフランスにおいては、このマイノリティによる実践が社会的に許容されない傾向が強い。2015年以降、「当事者のみ」を掲げた多くの集会や運動が、メディアや政治家による直接的な非難や検閲、極右団体による攻撃の対象となってきた。

<sup>12</sup> 非当事者からの資源や資本の提供を妨げたり、「マジョリティの排除」という側面についての反動的な非難を引き起こすという点で、独立性の確保を逆に毀損する恐れもある。

独立性のもう一つの側面、すなわち「精神的独立性 (autonomie mentale)」(Hajjat 2015) を想起させる。精神的独立性とは、他者(とりわけマジョリティ)から押し付けられた支配的な視点を拒絶し、自己と社会についての新たな解釈枠組みを確立することを意味する(ibid.)。精神的独立性に関して最も問題となるのは、差別的・抑圧的な視点の内面化と、それに伴う自らの(継承する)文化・記憶・言語の否定である。自らの文化・言語の否定やそれに起因する疎外は、F.ファノン(1952)が植民地における原住民＝黒人の「劣等コンプレックス」の問題として論じて久しいが(Fanon 1952: 8)、ポストコロニアルなフランスを舞台に同じ問題が提起されている。フランス社会から社会問題化され、「統合」という命題を突きつけられた旧植民地出身移民やその子孫は、自らがきちんと「統合」され、国民国家フランスにおける正当な存在であることを証明するために、自分自身の(継承する)文化・記憶・言語を否定しがちだとされる(Guénif-Souilamas 2000: 333)。かれらは、「統合」命令への一つの反応として「自己へのレイシズム(racisme contre soi)」(Guénif-Souilamas 2000: 330)や「自己に対する憎悪と類似する者への憎悪(haine de soi – haine des autres semblables)<sup>13</sup>」(Hajjat 2004: 84-85)を募らせる。

自分自身や同胞への「内面化されたレイシズム」(Kendi 2019=2021: 228)から脱し、独自の言葉／言語／思考で「独立した自己定義(independent self-definition)」(Hill Collins 2000: 107)を行う重要性もすでに指摘されてきたが、その難しさも同時に広く提起されてきた。「主人の道具で、主人の家を解体することは、絶対にできない(The master's tools will never dismantle master's house)」でA.ロード(Lorde 1984)が示したように、マイノリティを劣等化する支配的な思考や行為の形態に留まっていたら、その劣等化の支配からもまた抜け出すことができない。脱出の方法について、ロードはこう述べている——「革命的な変化を起こすために、本当に焦点を当てなければならないのは、わたしたちが逃れたいと求める抑圧的な状況ではなく、わたしたちの内側に深く植え付けられた抑圧者の部分<sup>14</sup>」(Lorde 1984: 123)。支配から脱出し精神的独立性を獲得するためには、まずは自己の身体や精神に内面化された思考様式を掘り起こし、その上で新たな思考と行為の形態を創造する必要がある。

より現実的には、政治的独立性と精神的独立性は単純に区別することはできず、両者は相互に関連して一つの独立性の問題を成している(Hajjat 2015)。〈声〉を取り戻すための抵抗は、それ自体において政治的・精神的独立性の両方を獲得する試みであると定義できる。それでは、本稿で着目する現代フランスの旧植民地出身移民女性やその子孫であるマイノリティ女性たちは、様々な制約と条件のもとで、どのようにして政治的・精神的独立性を獲得し、〈声〉を取り戻すのだろうか。その抵抗の場では、どのような道具や戦術が必要となるのだろうか。そしてとりわけ、自らの(継承する)文化・記憶・言語を否定し劣等化する支配的な解釈枠組みから脱する契機はどこにあり、新たな思考と行為の様式はどのようにして創造されうるのだろうか。

### 3. 研究方法——大衆地区の女性グループによる文化・芸術実践への着目

<sup>13</sup> 「類似するもの」とは家族や(社会的に同じ人種・エスニシティに属するとみなされる)同胞をさす。

<sup>14</sup> 該当部分の訳は虎岩(2016: 142)に依拠している。

上記の問いに答えるため、本稿では、パリ郊外・北東部のブラン＝メニル(Blanc-Mesnil)<sup>15</sup>市内のなかでも、とりわけ庶民階級(*classe populaire*)が多く居住するティヨル(Tilleuls)地区で、2002年前後から活動する女性グループを対象に行った調査の結果を用いる。ブラン＝メニル市はパリ市内から鉄道で30分ほどの距離に南北に広がるセヌ＝サン＝ドゥニ(Seine-Saint-Denis)県内の自治体である。市内の外国人人口、貧困率、失業率は国平均より高い。ティヨル地区は、最寄駅からさらにバスで15分(もしくは徒歩で35分)ほどの距離の、ブラン＝メニル市北部に位置する。市内は高層・低層団地が立ち並ぶ大衆地区と、一軒家が立ち並ぶ(下位)中産階級の地区に分かれ、ティヨル地区は前者にあたる。近年は老朽化した団地を取り壊しての再開発が計画され、郊外にまで浸透する都市部ジェントリフィケーションの最先端にある。ティヨル地区の中心部に位置し、四方を団地に囲まれた商店街は1990年代までに近隣に進出した大規模スーパーの影響で次第に衰退し、現在では、唯一小さな食料品店・肉屋・パン屋・薬局・ピザ屋が残るのみとなった。半分以上の店はシャッターが下りた状態で、学校離れし失業中の若者が入り浸る<sup>16</sup>。2005年の全国的な「暴動(*émeutes*)<sup>17</sup>」では、この商店街を含めティヨル地区内の複数箇所が放火された(Hadj Belgacem 2015)。

調査対象とした女性グループは、同商店街と隣接する社会センターで2002年から開かれた料理教室を起点に結成された。それ以降、様々なプロジェクトの立ち上げを契機にメンバーが加わるなか、自治体レベルでの政権交代を契機に徐々に活動休止に追い込まれる2016年まで<sup>18</sup>、常に10～30名ほどのメンバーが集ってきた。国籍と人種・エスニシティの側面から見た場合、メンバーの半数はアルジェリア・カビル地方出身女性やその子

---

<sup>15</sup> 社会調査においては、調査地や調査協力者を匿名化することがその倫理規範とされてきた。しかし本稿では、地名をそのままに用いた。また、本人が同意／希望した場合には姓を除いた本名を記している。研究者である私が、調査協力者の居住地や氏名を本人の意思に関わらず匿名化することは、彼ら／彼女らとその言葉や解釈の主体としてではなく、客体としてしまう暴力的な行為になりかねない。そして何より、調査対象者たち自身が、自分たちの土地や言葉に所有権をもつ主体として参照されることを望むことから、こうした選択に至った。他方で、すでにグループから退いたメンバーや、病気や高齢化により、直接話をするのが不可能となったメンバーについては、確認がとれないことから匿名化することとした。匿名化による当事者の語りの篡奪の問題については、石原(2013)も参照した。

<sup>16</sup> 1999年の国勢調査からは、ブラン＝メニル市における若年層(15-24歳)の失業率が27.6%にも達していることが示されている(Hadj Belgacem 2015: 192)。ティヨル地区に限った若年層の失業率統計は手元にないが、低所得者が居住する団地の割合からさらに高いと思われる。

<sup>17</sup> 2005年11月末から12月初めにかけて、ブラン＝メニル市と隣接する自治体、オルネー＝ヌー＝ボワ市内で2人の少年が警察の職務質問を逃れようと変電所に紛れ込み感電死した事件をきっかけに、フランス全土の大衆地区で車や施設が燃やされた。メディアや社会科学において支配的なのは「暴動」という用語だが、運動家や研究者の間には、警察による郊外の若者の殺傷事件をきっかけに発生する「暴動」のサイクルに、レイシズムへの怒りなどの政治的メッセージの含意を読み取り「暴動」よりも「反乱(*révoltes*)」を使う立場も存在する。

<sup>18</sup> ブラン＝メニル市は、労働者階級が歴史的に居住してきたパリ郊外のセヌ＝サン＝ドゥニ(Seine-Saint-Denis)県の多くの自治体と並び、1935年から約80年にわたり共産党政権の自治体だったが、2014年の地方選挙で右派自治体へと転換した。新市長となったThierry Meignenは共産党政権の遺産を除去することに熱心で、前市長の支援を受けてきた女性グループはその標的の一つとして、活動の場・資金・人的資本をことごとく奪われた(Tanabe 2019)。

孫が占め、その他のマグレブ地方出身者、セネガル出身者、トルコ出身者、そしてポルトガルを含む欧州出身の白人が複数名含まれる。世代という観点から見れば、2つの異なる集団を見出すことができ、それらは地理的・階級的な特徴とも呼応している。料理教室に集うなかでグループを構成する核となった60代～70代の女性たちは、専業主婦として子どもの教育を通してそれ以前にローカルなネットワークを形成していた。40～50代の女性たちは、その多くが社会運動の経験と職業（地域のソーシャル・ワーカー、写真家、ジャーナリスト、劇作家、社会学者）を持つかわらで、次第にグループに参加するようになった。前者の世代においては、ティヨル地区に住む者が多いが、後者の世代にはブラン＝メニル市外（特にパリ市内）からの参加者が半数ほど含まれる。また、前者の女性たちが就学歴がない／短い者が多いのに対して、後者の女性たちは最低でも中学卒業資格を持ち就業経験があることから、階級的に上位に位置する。

このように民族（人種）・階級・世代・就学歴・職歴における多様性を抱えながら、女性グループは、2002年から2016年までの間にほぼ途切れることなく多様な文化・芸術的なプロジェクトを創り上げ、発信してきた。筆者は、主に2012年10月から2016年6月にかけて女性グループへの参与観察・資料収集・インフォーマルなインタビューを行い、2014年6月から2019年4月にかけてフォーマルなインタビューを行った<sup>19</sup>。調査開始からフォーマルなインタビューに到るまでに1年半以上を要したことは、女性グループにおける「言葉（paroles）」の政治性と、政治的独立性の希求を映し出していた<sup>20</sup>。女性たちが集合的に活動するきっかけは、上述のように、ティヨル地区の社会センターで提供された料理教室だった。しかし実際のところ、彼女たちは、料理をするためというよりも、他の女性たちと会話し、「言葉を発する／発言する（prendre la parole）」ために来ていた。その帰結として、彼女たちの活動は料理教室にとどまらず、レシピ集の制作（2002年）、集まって会話をするための「お茶会（salon de thé）」（2002年～）、作家を招いて一緒に詩作をする企画（2003年）、プロの写真家とともに創る写真展の企画（2003年、2004年）、新聞への公開書簡（2006年）、ローカル新聞の発行（2006-2011年）、そして複数の演劇作品の制作・出演（2008年、2013年、2018年～）へと広がっていった。これらの文化・芸術的プロジェクトで扱われる主題は極めて幅広く、大衆地区における貧困、教育・雇用・住居における差別、家父長制、レイシズム、警察による暴力、民主主義、移民政策や移民史など多岐にわたる。

本稿では、これらのプロジェクトの中から、女性グループがプロの脚本家兼演出家、社会学者、ジャーナリスト、ソーシャル・ワーカーらと共同で、2009年から2013年にかけて制作・演出・出演した演劇作品、『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』を主な分析対象とする。この作品は、アルジェリア・カビル地方出身で自らもフランスに移住した社

---

<sup>19</sup> 資料収集については2019年まで継続的に行った。また、2016年以降は機会が減ったとはいえ、参与観察も断続的に継続した。

<sup>20</sup> 筆者は、女性グループの潜在的な参加者ないし協力者とみなされながらも、彼女たちの「言葉」にアクセスできないでいた。というのも、インタビューの申し込みは、絶え間なくはぐらかされ、延期され、土壇場の「問題」によって阻まれたからだ。この困難な調査経験自体が重要なデータになると判明したのは、調査を始めてだいぶ時間がたってからだった。

会学者／移民研究者、A.サイヤード<sup>21</sup>による複数の著作<sup>22</sup>から、1960～80年代のカビル地方出身の移民（やその子孫）の語りを引用し、聞き手／語り手としてのサイヤードと移民たちの移住をめぐる対話の形式で構成されている。以下ではまず、〈声〉を取り戻すという観点から作品の意義と政治性を考察し、その背景にある女性グループの組織形態と集合行為の特性を明らかにする。次にフランスで旧植民地出身移民の言語が置かれた特殊な状況を参照しながら、演劇作品の制作過程と作品それ自体における言語実践の持つ意味合いを分析する。そのことを通して、重層的な差別と排除の一側面を成す言語が、抵抗の戦術に使用されうること、またそのさいに言語が文化・記憶／歴史と密接に結びつき、フランス社会で支配的な旧植民地出身女性に対する差別的な眼差しから距離をとった形での自己定義や発言を可能にする様相を示したい。その帰結として、政治的独立性と精神的独立性を獲得する契機やその不／可能性の一端を明らかにすることを旨とする。

#### 4. 奪われた〈声〉を取り戻す——自らの記憶／物語を語ることへの渴望

『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』の舞台は、社会学者サイヤードがマイクを片手に、移住経験のある高齢の女性にインタビューする場面で幕を開ける——「以前は山に住んでいた...」。女性の語りは、グループ参加者のひとりであるタオス(Taous)本人のアルジェリアからフランスへの移住経験をカビル語と訛りのあるフランス語を入り交え伝えるものである<sup>23</sup>。アルジェリアでは山間部に住んでいたタオスが、パリという大都市を初めて目にした時の驚き——そして、先にフランスへ移住した夫が、アルジェリアまで彼女を迎えに戻り、再び一緒にフランスへ渡るさい、夫が用意した住居は一軒家かアパートのどちらだろうかと考えていたが、たどり着いた先ではトイレに行くにも200メートル歩かなければならず、「これがフランスなのか」と驚いた、というのがフランス語部分から理解できる語りの主な趣旨である。タオスによる導入部の語りが本人の実際の経験に基づくのに対して<sup>24</sup>、それ以後の劇中のセリフは、サイヤードの著作におけるアルジェリア・カビル地方出身の移民やサイヤード本人の語りがほぼそのままの形で引用され、演劇的にアレンジされたものから成る。しかし、タオス本人の経験の語りと、劇中で引用されるサイヤードの研究に登場する移民たちの語りはかなりの類似性を見せる。

移民当事者やその子孫である女性たちにとって、旧植民地出身移民の経験を伝え

<sup>21</sup> P.ブルデューの通訳としてアルジェリアで社会学と出会い、後にフランスに移住しフランス国立科学研究センター(CNRS)および社会科学高等研究院(EHESS)の主任研究員となった。

<sup>22</sup> Sayad, Abdelmalek, 1999, *Double Absence, Des illusions de l'émigré aux souffrances de l'immigré*, Paris : Édition du Seuil ; Sayad, Abdelmalek, 2006, *L'immigration ou les paradoxes de l'altérité : les enfants illégitimes*, Paris : Raisons d'agir ; 国立移民史博物館所蔵のサイヤードの私的書簡など。

<sup>23</sup> タオスの語りの詳細については次節で検討するが、資料1を参照のこと。

<sup>24</sup> これが本人の移住の物語であることは、筆者自身が確認している。私には、最初の居住先が「スラム(bidonville)」であったと明示した。私が立ち会うことのできた数回にわたる上演において、タオスは、カビル語とフランス語を混ぜ合わせるという形態や語りの内容は変えなかったが、詳細を微妙に変えた。裏返せば、「セリフ」として出来上がったものは存在せず、その時々で彼女自身の移住の物語を語っていた。



る作品を制作し、演技手としてその「歴史の担い手 (porteuse de l'histoire)」となることは、交差する差別構造のなかで奪われた〈声〉を、複数の側面において取り戻すことを意味する。まず、この作品は、フランスの支配的言説が想起させる移民とは異なるイメージを見る者に喚起する。『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』という題名は、サイヤードの1977年の論文「アルジェリア出移民の三世代 (Trois âges de l'émigration algérienne)」における、カビル地方からフランスへ移住した男性たちの語りを抜粋したもので、カビル地方の農村共同体の衣服を脱ぎフランスの(=西洋の)賃金労働者の衣服を身につける越境的な行為を象徴している。受け入れ国視点で語られがちな移民について、出移民 (émigration)・入移民 (immigration) の両側面を連続的な移民の経験として扱っている点が、移民についてのメディアや政治家の支配的な言説のみならず、主流の移民研究とも一線を画している。すなわち、出移民の存在が、カビル地方の農村社会秩序を数世代にわたって変容させたことを、アルジェリアとフランスの両方で移民現象を経験した当事者の語りから示していることに加えて、フランスに移住した後に待ち受けていた移民労働者としての生活の悲惨さ、フランス社会から労働力としてのみ扱われる虚しさ、帰れない故郷への思いや孤独など、移民をめぐる支配的な言説では言及されることのない当事者の移民経験が示される (Boulay et al. 2012)。これが、彼女たちが自ら語ることを渴望した、彼女たち自身の経験や家族の経験と合致する移民の物語なのだ。

しかし、旧植民地出身移民(やその子孫)の女性が自らの身体を通して、移民の物語を公共空間で発することは、支配的な移民についての言説を覆すにとどまらない政治的な意味を伴う。つまり、これまで眼差される「客体」だった旧植民地出身移民——しかもその中でもっとも周縁化・不可視化されてきた女性——が、舞台から観客に向けて移民の物語、すなわち自らの物語を語る「主体」となること<sup>25</sup> (Tanabe 2019)、さらにはその「主体」の発する語りが支配的な移民言説とは異なり移民の視点に基づいていること、この二つの要素が重なることでフランス社会における既存の表象秩序を「乱す性質」(nature subversive) (Hadj Belgacem 2017: 132)を持つ。

さらに、舞台に登場する女性たちは、一方では、タオスのように頭にスカーフをまとい、フランス社会からは「伝統的」と評されがちな彼女たちの「いつもの」服装で、移民女性や移民の家族としてフランスやアルジェリアでの経験を語る。他方で、フランスで生まれたより若い世代の女性たちは、この時代に典型的な移民労働者の服装——薄汚れたジャケット、劇名通りの「フランスのズボン」、労働者階級を象徴するベレー帽、移民を象徴するトランク——を衣装として身につけ移民男性に扮する。彼女たちが演じるのは、主に自分の父親、叔父、祖父や兄弟である。彼女たちは、自らが「語られる対象」から脱し自分たちの物語を公共空間で発言するだけでなく、可視化されることのなかった年配の同胞男性たちを、自分たちの身体を通して公共空間に存在させることを望んだ。移民男性へのオマージュは、移民をめぐるジェンダー化された支配的言説だけでなく、フランス社会のマジョリティをめぐる解釈枠組みをも攪乱する。

前述のように、フランスにおける旧植民地出身移民(とその子孫)の女性たちは、しば

---

<sup>25</sup> フィリップとのインタビュー、2018年9月、パリ。

しば同胞男性の支配下におかれた家父長制の被害者として表象されている。彼女たちは、移民男性が「固執」する「前近代的な男性性」や宗教に閉じ込められ、自らを解放できないでいるとみなされる。近代化するためにはスカーフを脱ぎ捨て、移民男性と決別し、フランス的・世俗的な文化に溶け込むことが求められる(Guénif-Souilamas & Macé 2004)。このシナリオを土台に、フランス社会のマジョリティは、「前近代性」とそれを象徴する有色の移民男性から有色の移民女性を救い出す主体として自らを位置付けてきた。この関係性においては、移民男性も移民女性もその二項対立的な関係性のなかで客体化される。しかし、移民男性の語りを女性たちが伝え共有するこの演劇作品では、移民男性と移民女性の「二項対立性」や「支配関係」が解体され、むしろ連帯によって結ばれた関係性が提起される。ジェンダーと人種の交錯する構図において、白人フランス人を道徳的に優位な主体として位置付けるフランス社会の支配的な言説は、この演劇において無効化される。こうして、女性グループは、『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』の演劇の舞台を通して、押し付けられた「移民女性」像とは異なる自己定義を作り出し、逆にそれに依拠していたフランス社会のマジョリティの自己定義に変更を迫った(Tanabe 2019)。

このように、支配的言説・イメージを覆す語り・表象を提示する演劇作品の制作が可能となったのは、まずもって、女性グループが作り上げた独自の組織形態とそれによる集合行為の性質に依るところが大きい。女性グループは、その「主要なメンバー」とされる女性参加者と、独自の職業能力を携え支援者ともなる参加者(女性および男性)から成り、後者のメンバーは運動の「参加型同盟者(allié participant)」(Tanabe 2019: 189)としての位置付けを持つ。ただし、当事者と同盟者は、共に作品を作り上げる「協働者<sup>26</sup>」の位置付けにあり、『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』に関していえば、脚本家兼演出家、社会学者ら、ジャーナリスト、社会センター長は、主要なメンバーである参加者と対等な発言権を持つ個人として位置付けられた。つまり、各「専門家」は作品制作のいかなる側面においても特権的な地位にはなく、「協働」作業においては、各々がその資源を分け合うことが原則とされた。すなわち、専門家はその職業能力にもとづいて意見表明するが、それが参加者に受け入れられるとは限らず、逆に他の参加者が賛同すれば演劇の素人である一参加者の意見が脚本執筆や演出において決定的となることもあった。逆に、各参加者の直面する障壁が参加の度合いに影響を与えないように、障壁は取り除かれる工夫がなされた<sup>27</sup>。こうした原則のもとで、演劇作品の脚本は、題材となったサイヤードの著作から各々の参加者が語りを選び、それを土台に脚本家がシナリオを執筆し、全参加者で改めて再検討するというプロセスを1年半に渡り繰り返すなかで作り上げられた。旧植民地出身移民とその子孫であるメンバーは、こうして、「共同制作者(co-productrice)」、「共同脚本家(co-auteur)」、「共同演出家(co-metteuse en scène)」の地位で演劇制作に関わった<sup>28</sup>。このような組織と集合行為のあり方は、旧植民地出身移民の経験を物語る

<sup>26</sup> 後述するように、co という接頭辞が示唆する「共有する(mettre en commun)」者との意味合いをもつ。

<sup>27</sup> 例えば、非識字のメンバーが理解できるように全ての紙資料は読み上げられ、彼女たちの意見は別のメンバーによって書き取られた。

<sup>28</sup> ズイナとのインタビュー、2018年6月、ブラン＝メニル。

演劇の制作にあたり、「当事者」の政治的独立性を確保するという意味で不可欠な条件だったと言える。

しかしながら、この演劇を通じた彼女たちの発言の場は、「政治的同盟者」としての市議会議員らの後押しを得たにも関わらず、長くは続かなかった。「大衆地区にも文化を」という自治体の政策に反して住民が観劇に訪れないことが課題とされたブラン＝メニル市の市立劇場では珍しく、2回の超満員の観客動員を成し遂げたにも関わらず (Hadj Belgacem 2017)、この作品は劇場の演劇専門家の評価を得られず——むしろ「不評」を買い、わずか4回の上演で幕を閉じた。発言の場という側面における政治的独立性は、獲得されるかされないかのうちに、その回路が閉じられてしまったのである。

## 5. 言語と文化を取り戻す——差別と抑圧への対抗

『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』が「不評」を買った理由は、上記以外にもある。資料1.に示された作品冒頭のタオスの語りのように、劇中の登場人物のセリフには、しばしばフランス語とカビル語が入り混じり、カビル語のフランス語訳が示されない。そのため、カビル語を解さないフランス語話者の観客は、一部「虫食い」状態の物語と出会うことになる。この言語実践は、その主体が旧植民地出身移民(とその継承者)の女性であるということもあわせて、極めて政治的な意味を持つ。

近世フランスの支配者たちは、すでに法のもとにフランス語を公的な言語と定め、ラテン語やオック語をはじめとする他の言語を公的文書から追放したが、革命政府以後は、国民統合の要としての「国家の言語 (langue nationale)」、すなわちフランス語の絶対的地位が確立され、同時に少数言語は徹底的に抑圧されてきた(田中 1981)。戦後、並んで多くの移民労働者を受け入れ、多言語・複言語主義が重視されるようになった欧州にあっても(定松 2008)、フランスでは「唯一不可分の共和国の唯一の公用語」として「日常生活のあらゆる場面においてフランス語を使うことが求められ」(園部 2008: 96)、少数言語教育・継承語教育や複数言語主義などが受け入れられる余地は相対的に低いままである。

とりわけ、旧植民地出身移民の言語(母語/継承語)は、植民地支配の時代にあってはフランス語との関係において人種・文化的に劣等のものとして序列化され(Fanon 1952=1998)、脱植民地化後のフランスにおいては「移民の統合」を妨げ「非行」を導くものとしてスティグマ化されてきた。2004年および2005年に与党の国会議員 J.-A. ベニステイが率いた「国内治安についてのワーキンググループによる予防委員会」が当時の首相 D. ドビルパンに提出した「非行の予防」をめぐる報告書は、1970年代いらい移民の子どもと関連づけられてきた「非行/逸脱の予防」という政策の延長線上で、外国人の親の言語の継承と非行/逸脱を関連付けた。すなわち、複数言語の使用(plurilinguisme)には潜在的に非行/逸脱とむすびつく病的な性格があるとして、フランス語以外の言語、とりわけ移民の言語の継承と実践を否定的に評価し、外国人の親がいる家庭でのフランス語の

絶対性／優位性の確立を提起している(Bénisti 2004, 2005)<sup>29</sup>。

演劇という公共空間において、レイシズムと連関した抑圧の歴史と政治的文脈を伴う言語を、母語／継承語として提示することは、それ自体が抵抗の行為となる。その含意は、社会やマジョリティによる差別や支配／抑圧に異議を申し立てることにとどまらず、マイノリティ自身が内面化した差別的な眼差し、すなわち「自己に対する憎悪と類似する者への憎悪」に抵抗することにもある。演劇作品『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』の考察からは、これらの両側面を、①演劇制作のプロセスと、②その帰結としての演劇作品における言語実践に見出すことができる。

### ①演劇制作のプロセス——母語／継承語と「知的主体」の復権

アルジェリアのカビル地方からフランスへの移住経験をテーマとした演劇を制作するにあたり、女性グループの「協働者」である社会学者らと社会センター長は、移民が生まれ育ったカビル地方の当時の農村社会制度・文化を背景知識として学ぶ必要があると考えた。そこで議論の末に提案されたのが、農村社会・文化について学ぶためのクイズ形式のアトリエ(全 10 回)である。社会学者らが用意した資料は、民族誌的手法にもとづいた学術研究に伴う視覚資料に加えて、カビル地方で生まれ育ち、1960～1970 年代に自ら移住を経験した高齢の女性たちの「記憶」である。彼女たちは、識字ができないが農村社会・文化を知る「口頭の辞書(dictionnaire oral)<sup>30</sup>」としての役割を任せられ、写真や図のヒントをもとに率先してクイズに答え、フランス生まれでカビル語を継承語とするアトリエ参加者や、必ずしもカビル地方の農村社会・文化に家族的な関わりのない参加者たちに、その言語・文化的知識を伝えた。さらに、このアトリエに続いて行われた、サイヤードの著書からのアルジェリア・カビル地方出身移民の語りの抜粋を用いたグループ・ディスカッションでも、語りに頻出するカビル語の用語や表現を、これら非識字の高齢女性たちが説明し、移住のプロセスや背景に関して記載されていない事柄も補足して見せた<sup>31</sup>。

自らの言語的知識や記憶が集合的に「価値あるもの」とみなされ、「知る者」としての地位を経験したことについて、就学歴のない／非識字の女性たちは調査者である筆者に驚きと誇りをもって伝えた——「私たちが、カビル語で説明した。何を意味しているか、そ

<sup>29</sup> 報告書は、科学的知見をほとんど参照せずに執筆されたことから、言語学者による激しい批判とメディアにおける論争を引き起こした(Muni 2009)。戦後の国策により、労働者階級の旧植民地出身者(および近年ではその他の人種マイノリティ移民)が歴史的に多く居住してきた大衆地区には、カビル語・アラビア語・サブサハラ-アフリカの言語・トルコ語・中国語などを母語／継承語とする者が多く居住しており、非行や逸脱と結び付けられた外国人／移民の母語をめぐるスティグマは階級的・地理的・人種的・文化的なスティグマと重層的な関係にある。なかでも、アルジェリア出身移民の多数を占めるカビル地方出身者の少数派言語であるカビル語は、フランス語とアルジェリア語との関係において二重に抑圧・スティグマ化された状況にあるとされ、1999 年の移民の言語の継承をめぐる調査の分析(アラビア語よりも世代を超えた継承がされていないという分析結果)をめぐるスティグマのために当人たちが「カビル語を継承している」と申告しづらいのではないかという指摘がある(Chaker 2010: 53)。

<sup>30</sup> ファリッドとのインタビュー、2018 年 5 月、パリ。

<sup>31</sup> ファリッドとのインタビュー、2018 年 5 月、パリ。

ういうこと全部。彼〔ファリッド〕〔アトリエのファシリテーター〕は読めるけど、知らないから。私たちは何を意味するか知ってる」<sup>32</sup>。このアトリエは、カビル語を母語とする女性たちにとって、彼女たちの言語的知識を発揮する機会をもたらした。非識字の女性たちは、日常生活のあらゆる場面において、識字ができる／フランス語を使いこなせる家族・友人・専門家の助けを必要としている。移動や行政手続、子どもの教育において、識字ができないこと／フランス語が上手く話せないことは、常に「教えられ」「助けられ」る立場に置かれることを意味する。アトリエでの経験は、自らの母語とその文化・歴史的な含意を他者に「教える」行為を通して、言語に関わる自律性を発揮し、その母語が「非行」と結び付けられて語られる社会での経験から距離をとると同時に、むしろ知的・文化的・言語的な〈主体〉として自らを再認識／再定義する機会となった。

カビル語を母語とする女性たちにおける主体性の獲得は、移民の子どもでカビル語を継承語とするアトリエ参加者たちにも大きな変化をもたらした。アトリエを準備したファシリテーターは、自らがカビル語を継承語とする。彼は、配布資料のなかに社会学者 P.ブルデュエによるアルジェリアの農村住居構造についての分析を忍ばせたが、カビル地方で生まれ育った女性たちはそれを「こっぴどく笑」い、「その解釈は間違っていると主張」したと得意げに教えてくれた<sup>33</sup>。他にもカビル語を継承語とする者のなかには、それまで自らの母親について、フランス語が話せないこと、非識字者であることを「恥ずかしい (*avoir honte*) 」と感じてきた者も多い<sup>34</sup>。こうした感情は、主流社会の差別的眼差しを内面化した結果だが、アトリエを通して、彼女らを劣等化する眼差しを内面化していることに初めて気づき、彼女ら(彼ら)が実際にもつ知識の豊かさに圧倒されたと語る参加者は少なくない<sup>35</sup>。

さらに、カビル語を母語・継承語としない者や文化・人種的にマジョリティである参加者も、「彼女たちの知識や経験の豊かさを知る機会を得て、彼女たちへの眼差しが変わる<sup>36</sup>」経験をした。これはすなわち、自らが彼女たちへの劣等化の眼差しを内面化していることを自覚し、それが変化する機会を得たことを意味する。このように、カビル語とそれに関わる文化や記憶について集合的に「取り戻す (*se réapproprier*)<sup>37</sup>」実践は、様々な立場の者にとって、「知る者」と「教えられる者」、文化的／知的に優位とされる者と劣位とされる者の関係性を攪乱させる意味合いを持つ極めて政治的なものだったと言える。

## ②演劇という公共空間におけるカビル語の使用——言語・文化秩序への不服従

<sup>32</sup> ファトゥマとのインタビュー、2014年4月、ブラン＝メニル。

<sup>33</sup> ファリッドとのインタビュー、2018年5月、パリ。

<sup>34</sup> 非識字率は女性の方が圧倒的に高い。その理由は、出身文化における女性の教育についての考えによるものだけではなく、植民地支配によるコーラン学校の閉鎖や、移住先のフランスで労働者のための識字教育の恩恵を受けた男性たちと比較して、専業主婦の女性のための識字教育が制度的に確立されていなかったことも影響していると考えられる。

<sup>35</sup> *Maison des Tilleuls*. 2013. « Sayad a raconté les hitoires de nos vies », *Vu d'ici*, n°15.

<sup>36</sup> アーレットとのインタビュー、2014年6月、ブラン＝メニル。

<sup>37</sup> この表現は、女性グループ内で、「言葉を取り戻す (*se réappropriier les paroles*)」「記憶／歴史を取り戻す (*se réappropriier la mémoire / l'histoire*)」「文化を取り戻す (*se réappropriier les cultures*)」などの組み合わせで頻繁に使われていた。

上述のプロセスを経て制作された演劇、『そして、我々はフランスのズボンを履いた・・・』では、すでに述べたように、登場人物のセリフ内にフランス語とカビル語が入り混じるコードスイッチングがしばしば見られ、カビル語のフランス語訳が示されることはない。公共空間におけるこうした言語実践の選択は、登場人物を演じる女性たちの「伝統的」とされる衣装やスカーフの着用とあわせて、フランスで歴史的に構築された言語・文化秩序に挑戦する意味をもつ。

まず、フランス語とカビル語が入り混じった形での発話は、フランス語の限界／境界を示し、フランス語の特権的な位置付けを攪乱する。これは、フランスという国民国家の規範言語であるフランス語を所有する「フランス語(中心)話者」の、受け手としての「言語的ポジションを転倒」(De Certeau 1980=2021: 126)させ、演劇の空間において脱中心化し、周縁的なものにする実践でもある<sup>38</sup>。

複数の言語の入り混じった物語は一人の人間の語りのなかで重層的、複数的、雑種的に表現され、その境界自体もまた曖昧にする。メキシコ人の先住民を祖先にもつアメリカ・テキサス生まれの詩人・研究者 G.アンサルドゥーア(Anzaldúa 1987, 1990=1991)がその著書で、継承語としてのスペイン語を英語と織り交ぜ表現したのも、境界の曖昧さだった(吉原 2000)。複数言語の混交により表現された境界の曖昧さ自体が、特定の言語の特権性や中心性を突き崩す効果を持つと言えるだろう。

さらに、カビル語にフランス語訳を伴わせないことは、カビル語を解さないフランス語話者がカビル語話者の物語へ安易に接近することを阻む意味をもつ。脚本のもとになった論文のひとつ、「フランスのアルジェリア出移民の 3 世代」の導入部においてサイヤード(Sayad [1977]1999)は、フランス語話者に対して、フランス語に訳された移民の言葉を見てわかった気になってはいけない、悪気のない者がしばしばフランス語で移民を代弁しようとするが、訳された言葉は文化的背景やその言葉の根幹を成す意味を欠き、その真正さを不可避的に「不透明なもの(l'opacité)」にする、と警告している(Sayad [1977]1999: 25)。そのことを踏まえたうえで、移民たちの言葉を読んでほしい、安易に「知」ろうとせず良く理解する努力をせよ——それでも不可避的に不透明さは残るだろうが、というのがサイヤードのメッセージだ。マルティニーク出身の作家・思想家の E.グリッサン(1996)は、似たような観点から、他者の文化を客体化し、無理やり解釈しようとする知的な支配への欲望を、「不透明性への権利(droit à l'opacité)」(Glissant 1996: 71)という表現を用いて拒否した。いずれも、支配的な言語の枠組みのなかに他者の言語を安易に翻訳／客体化することへの強い批判である。

これらの議論をフランス語とカビル語で物語る女性たちの演劇に引きつけて考えてみれば、彼女たちはこの演劇を通して、マイノリティであるカビル語話者の女性たちの物語を、マジョリティのフランス語話者の規範によって解釈され、〈客体化〉されることへの抵抗の手段として言語(カビル語)を「不透明」化したと言える。さらにこの「不透明」化は、言語やその意味に限ったことではなく、「普遍的」な立場から彼女たちの言語・文化・記憶／歴史について「客観的」に理解することができる、すなわち「知」の対象とすることができるとい

---

<sup>38</sup> 発話者と読者の関係について、Fanon(1961)におけるサルトルの序文を分析した Butler(2006=2011)の議論を参照した。

うフランスに特有の普遍主義への異議申し立てをなしているとも言えるだろう。

#### 4. 終わりに

本稿での分析からは、フランスの旧植民市出身移民(とその子孫)の女性たちの抵抗——〈声〉を取り戻す実践において、他者と対等な発言・組織化・集合行為の機会や空間を取り戻す政治的独立性の希求だけではなく、母語や継承語、それと関連する文化や歴史／記憶を取り戻し、精神的独立性を構築する試みが観察された。フランス語ではない、旧植民地の言語を母語や継承語として積極的に位置付ける(学ぶ)ことは、序列化された言語・文化秩序のなかで自らが内面化した差別的な眼差しから解放され、自らや他者、そしてフランス社会を再定義するための新たな言葉や概念を見つけ出す反差別の戦術にもなる<sup>39</sup>。

しかし、こうした戦術を生み出しうる「場」は、ド・セルトー(1980=2021)にならえば、「一瞬差し出された可能性」でしかなく、抑圧された者の自由にはならない「非-場所」である(De Certeau 1980=2021: 122)。確かに、その可能性は政治的独立性と連動した外的な「同盟(alliance)」とそれがもたらす政治機会にも大きく依拠している。さらに、言語秩序への不服従に対するバックラッシュも不可避である。本稿で考察した演劇に関して言えば、参加型同盟者との協働作業で開けられ、政治的同盟者に後押しされた政治機会は、この演劇を「社会的すぎる(trop social) [十分芸術的ではない]」「閉鎖的／集団主義的(communautarisme)である」「[より西洋的な文化・芸術の代表作である]シェークスピアを演じてはどうか」(Tanabe 2019: 294-301)と評す芸術専門家らの声によって、いとも簡単に閉じられ、上演回数はたったの4回にとどまった。政治的独立性という意味での〈声〉の獲得は、極めて限定的だったと言わざるをえない。他方で、演劇制作のプロセス、上演のプロセスを通じた集合的な言語実践は、女性グループのメンバーらに知的・文化的・言語的に新たな自己定義と、マイノリティの文化・言語・記憶をめぐる新たな解釈枠組みをもたらした。こうした新たな自己定義と解釈枠組みの獲得は、精神的独立性という観点において、より持続的な効果をもつと言えるのではないだろうか。今後の研究では、精神的独立性の獲得と政治的独立性の獲得がどのように接合されるのかをさらに問いながら、〈声〉を取り戻す抵抗の可能性／不可能性についての考察を一層進めていきたい。

---

<sup>39</sup> 他方でこれが、文化や人種・民族集団を本質化する方向に向かうのであれば、支配的な思考枠組みから脱出したことにはならないので注意が必要である(Hajjat 2015)。

## 資料 1. 演劇冒頭のタオスの語り

【原文】 \*「+」はカビル語での発話。「+」ひとつが一秒にあたる。聞き取れない部分は「///」と表記  
[00:14-00:18]

**Sayad** : /// (incompréhensible)

[00:19-04:21]

**Taous** : “Avant, j’habite à la montagne. ++++++1953, et moi, je suis venue en 63 aussi. Ça fait 10 ans. Et il est rentré /// 10 ans. Après, il est venu me chercher à l’hôpital. +++++ jusqu’à Alger et on a passé la nuit à Alger, ++ on a pris l’avion. On descend à Orly, on a pris le taxi parce que, moi, j’habitais à la montagne. Je connais rien ! Je vois rien ! C’est la première fois que j’ai vu la ville de ma vie. Après, /// regarder de droite à gauche /// que j’ai pas vu ça. Après +++++ j’ai trouvé un pavillon. Il habite dans un pavillon? j’ai pas demandé. Eh bah c’est un appartement. J’étais pressée d’arriver à la maison. Mais +++++ On a passé la ++ là dedans, /// les toilettes à deux cents mètres de la maison. ++ quoi ! La maison ++ ! Deux cents mètres. Et pour faire la douche, chais pas combien de kilomètres +++++ alors là, c’est la camarade,+++++. On dirait +++++ la petite porte comme ça. Après je l’ai /// à pieds. Rentrée. Je l’ai mit dans la bassine, je lui mets de l’eau. Après c’est +++++ la France ! C’est la France. C’est comme ça, la France !

[04:22-04:23]

**Sayad** : +++++ (« merci » en kabyle)

【和訳】 \*フランス語以外の表記に関しては原文と同様の表記

[00:14-00:18]

**A.サイヤード** : /// (聞き取り不能)

[00:19-04:21]

**タオス** : 「昔は山に住んでた。+++++1953年、それから、私は、私も、63年来た。10年が経つ。彼は戻って///10年。その後、彼は私を病院に迎えに来て、アルジェまで++++、その晩はアルジェで過ごし、++ 飛行機に乗った。オルリー〔空港〕で降りてタクシーに乗った。私は山に住んでいたから、何も知らない、何もわからない！人生で初めて都市を見た。その後 /// あちこち見て /// 見たことがない。そして、++++ 一軒家を見た。一軒家に住んでいるのか私は尋ねなかった。アパートかもしれない。早く家に着きたかった。でも +++++ そこを通り、++ その中で /// トイレは家から200メートルも離れてる。++というわけ！家は++！200メートル！シャワーには何キロ歩くかわからな+++++そんなわけで、仲間が,+++++まるで+++++小さな扉。足で///した。中に入る。バケツの中に入れる。水を入れる。そして +++++ フランス！これがフランス。これが実際のフランス！

[04:22-04:23]

**サイヤード** : +++++ (カビル語で「ありがとう」)



## 参考文献

- ALI, Zahra (dir). 2012. *Féminismes islamiques*. Paris : La Fabrique Editions.
- ANZALDUA, Gloria. 1987. *Borderlands La frontera*. San Francisco : aunt lute books.
- . 1990. « La conciencia de la mestiza : Towards a New Consciousness in *Making Face, Making Soul* ——*Haciendo Caras* (=1991. 斎藤文子訳「メスティーサの自覚——新しい自覚に向けて」『現代思想』19(9) : 63-75.)
- BENISTI, Jacques-Alain (dir). 2004. *Rapport préliminaire de la Commission Prévention du Groupe d'études sur la sécurité intérieure*, Sur la prévention de la délinquance, Assemblée nationale, XII<sup>e</sup> Législature.
- (dir). 2005. *Rapport définitif de la Commission Prévention du Groupe d'études sur la sécurité intérieure*, Sur la prévention de la délinquance, Rapport définitif, Assemblée nationale, XII<sup>e</sup> Législature.
- BOUAMAMA, Saïd. 1994. *Dix ans de marche des Beurs. Chronique d'un mouvement avorté*. Paris : DDB.
- . 2013. « Introduction », dans collectif et al., *Femmes des quartiers populaires en résistance contre les discriminations*, Paris : Le temps des cerises, 17-30.
- BOUBEKER, Ahmed. 2003. *Les mondes de l'ethnicité : La communauté d'expérience des héritiers de l'immigration maghrébine*, Paris : Balland.
- BOULAY, Philippe, Albertine M. ITELA & Zouina MEDDOUR. 2012. « Et puis, nous passons le pantalon français », *Hommes & Migrations*, 1298 : 140-143.
- BUTLER, Judith. 2006. « Violence, non-violence : Sartre on Fanon », *Graduate Faculty Philosophy Journal* 27(1) : 3-24 (=2011. 尾崎文太訳, 「暴力、非暴力——ファンオンにおけるサルトル」『クアドランテ』12/13 : 227-244).
- CHAKER, Salem. 2008. « Que sait-on de la pratique et de transmission du berbère en France ? » *Cahier de l'Observatoire des pratiques linguistiques*, 2 : 49-56.
- COLLECTIF et al.. 2013. *Femmes des quartiers populaires en résistance contre les discriminations*, Paris : Le Temps des Cerises.
- DE CERTEAU, Michel. 1990[1980]. *L'invention du quotidien, I : Arts de faire*, Paris : Édition Gallimard. (=2021, 山田登世子訳『日常の実践のポイエティック』筑摩書房).
- FANON, Frantz. 1952. *Peau noire, masques blancs*, Paris : Édition du Seuil (=2004[1998]. 海老坂武・加藤晴久訳『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房).
- GLISSANT, Édouard. 1996. *Introduction à une Poétique du Divers*, Paris : Gallimard.
- GUENIF-SOUILAMAS, Nacira. 2000. *Des «beurettes»*, Paris : Grasset.
- & MACE Eric. 2004. *Les féministes et le garçon arabe*, La Tour-d'Aigues : Éditions de l'Aube.
- HADJ BELGACEM, Samir. 2015. *Représenter les « quartiers populaires » ? : Une socio-histoire de l'engagement électoral et partisan dans les cités d'une municipalité communiste*, Thèse de doctorat, École Normale Supérieure.
- . 2017. « Faire du théâtre dans les cités : Retour sur la création d'une pièce où l'éducation

- populaire renoue avec ses visées d'émancipation », *Agora débats/jeunesses*, 76 (2) : 119.
- HAIJAT, Abdellali. 2005. *Immigration postcoloniale et mémoire*, Paris : Éditions L'Harmattan.
- . 2011. « À la frontière du politique. Action et discours des 'des jeunes de cité' de SOS Avenir, Minguettes (1981-1983), dans Bérout, Sophie et al.(dir). *Engagements, rébellions et genre : 1968-2005*, Éditions des archives contemporaines, 13-24.
- . 2013. *La marche pour l'égalité et contre le racisme*, Paris : Éditions Amsterdam.
- . 2015. « Les dilemmes de l'autonomie: assimilation, indigénisme et libération », *Quartiers XXI*, Octobre 7, 2015. <https://quartiersxxi.org/les-dilemmes-de-l-autonomie-assimilation-indigenisme-et-liberation/>.
- HILL COLLINS, Patricia. 2002. *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*, Routledge.
- 石原孝二編. 2013.「当事者研究の誕生」『当事者研究の研究』医学書院, 11-71.
- 伊藤るり. 1988.「80年代フランスにおける移民労働者の権利要求運動と意識変化——一定住化のなかの階級とイスラム」『国際政治』87号, 42-57.
- KENDI, Ibrahim. X. 2019. *How to be an antiracist*, New York : One World(=2021, 児島修訳,『アンチレイニストであるために』辰巳出版).
- LARCHER, Syliane. 2017. « 'Nos vies sont politiques !' L'afrofémisme en France ou la riposte des petites-filles de l'Empire », *Participations*, 19(3) : 97-128.
- LORDE, Audre. 1984. *Sister Outsider: Essays and Speeches*. NY : Crossing Press.
- 森千香子. 2016.『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会.
- MUNI, Toke V. 2009. « Fantômes d'un plurilinguisme pathogène : le cas des rapports dits « Bénisti », *Le français aujourd'hui*, 164 : 35-44.
- 村上一基. 2019.「訳者解題」『現代フランスにおける移民の子孫たち』エマニュエル・サンテリ著, 明石書店, 155-167.
- MWASI COLLECTIF AFROFEMINISTE. 2018. *Afrofem*. Éditions Syllepse.
- NASRI, Foued. 2011. « Zaâma d'Banlieue (1979-1984) : les pérégrinations d'un collectif féminin au sein des luttes de l'immigration », dans Bérout, Sophie et al.(dir). *Engagements, rébellions et genre : 1968-2005*, Éditions des archives contemporaines, 65-78.
- . 2018. « Les enjeux de visibilité et de représentation des femmes dans les mobilisations des héritiers de l'immigration », dans Fouad NASRI & Samir HADJ BELGACEM, *La Marche de 1983. De la mémoire à l'histoire d'une mobilisation collective*, Paris : Presses Universitaires de Paris Nanterre.
- 定松文. 2008.「移民と言語——人は異動するという前提から言語と社会をとらえる」『ことばと社会』11号, 6-25.
- SAYAD, Abdelmalek. 1977. « Les trois "âges" de l'émigration algérienne en France », *Actes de la recherche en sciences sociales*, 15(1) : 59-79.
- . 1999. *La Double Absence. Des illusions de l'émigré aux souffrances de l'immigré*, Édition du Seuil, Paris : Seuil.
- SCOTT, James C. 1987. *Weapons of the Weak: Everyday Forms of Peasant Resistance*, Yale

University Press.

- 園部裕子. 2008. 「『承認』を求める仲介と活動資本としての言語——フランスにおける西アフリカ出身女性仲介者の経歴分析から」『ことばと社会』11号, 93-120.
- 田中克彦. 2021[1981]. 『ことばと国家』岩波書店.
- 田邊佳美. 2016 「『ムスリム女性』とイスラーム・フェミニスト——フランスにおける普遍主義と当事者性」『女たちの21世紀』85 : 24-27.
- TANABE, Yoshimi. 2018. « De l'antiracisme au travail de mémoire : Le changement de conscience politique au Tactikollectif », dans Fouad NASRI & Samir HADJ BELGACEM, *La Marche de 1983. De la mémoire à l'histoire d'une mobilisation collective*, Paris : Presses Universitaires de Paris Nanterre.
- . 2019. *Résistance épistémique des actrices et acteurs (descendant-e-s) de l'immigration postcoloniale : Mémoire, subjectivité, sagesse*, thèse de doctorat, Université Paris 13.
- 虎岩朋加. 2016. 「ポスト構造主義の後のフェミニスト・ペダゴジーはどのようなものでありうるか——What Can Feminist Pedagogies Be after Poststructuralism?」『Forum on Modern Education』25 : 139-147.
- 吉原令子. 2000. 「境界に位置するIdentities——グロリア・アンサルドゥーアのBorderlands/La Frontera : The New Mesizaを通して」『英米文化』30号, 79-100.